狩野景
挿絵 鈴木玖

わたしのおっぱい育ててよ！

幼馴染みとお嬢様の育乳バトル

立ち読み版

2DB
二次元ドリーム文庫

第一章　採めよ育てよ

塞城士郎は夢の中にいた。

幼い頃から繰り返し見てきた夢。

そこは空も地面も、自分の周りすべてがふわふわな世界だった。

よく夢には匂いがないというが、その夢の中は搾りたてのミルクみたいな、甘く芳醇な香りに満たされている。

手を伸ばせば、掌を豊満な膨らみがムッチリと満たしてくる。

極上の柔らかさを捏ね回すと、その膨らみにどこまでも指が埋まり込み、ふわふわの夢世界が生暖かく火照りながら薄桃色に染まった。

「んふぁ……、しろ……お……」

耳朶を擽るような微かな喘ぎが吐息と共に吹きかけられ、ゆっくりと意識が覚醒した。

「あはぁ、士郎〜、おはよう、朝だよ〜」

まだ眠い目を薄く開けると、人懐こそうな美貌が屈託のない笑みを浮かべていた。黒目がちな大きい眼が小動物的な愛くるしさを醸し出している。

仰向けに寝ている士郎の腹に弾力的なお尻を乗せて跨がり、彼の顔の側に片手を突いて

のしかかるように覗き込んでくる。
栗色のふわふわな髪を白いリボンでツインテールに纏めて、可愛らしさを倍加させる。
華奢な肩を大胆に出したピンクのタンクトップと、今にもパンツが覗けそうな短い黒のスカートが、躍動的な肢体によく似合う。
真美谷千恵。塞城家の隣家に住む、同い年の幼馴染みだった。
「千恵、お前また勝手に部屋に入ってきて!!」
文句を言いながら、士郎の視線は彼女の愛くるしい美貌ではなくその下の大胆に大きく開いた胸元へと引き寄せられてしまう。
「だって士郎、一人で起きられないから起こしてあげてねって、士郎のお母さんからも頼まれてるもん」
パッチリとした瞳を輝かせて、朗らかな美少女が得意気に言う。
その天使の微笑みすらも視界の隅に辛うじて留めながら少年が凝視する胸元で、マスクメロンほどもある圧倒的な大きさを誇りながら、美麗な玉葱型を完璧に保持する美巨乳がタンクトップの胸元から今にも弾け出しそうに弾んでいた。
（く……相変わらず反則的に見事なおっぱいだよな……）
そんなことを心の中で思いつつ、一切顔には出さず士郎は迷惑そうな表情を浮かべた。
部屋がベランダを挟んで向かいなため、お互いの家を行き来する時は、窓から窓へ直接

部屋に入ってくることが多い。とはいっても、士郎がそんなことをしていたのはさすがに幼い頃までだ。
なのに彼女は未だに、前触れもなく窓から彼の部屋に入り込んでくるのだ。
「窓越しに直接入ってくるなよ。せめて玄関から来いってば」
ツインテールの栗色髪を揺らし、悪びれもせず満面の笑みを浮かべる幼馴染みに、いつも通りの小言を返す。
「それに、人が寝ている間に、勝手におっぱい揉ませるなってば!!」
これもいつもと同じ言葉。
「えへへ、極上の揉み心地で爽やかな目覚めでしょ」
確かにその通りだが、癪なので返事してやらない。
「隣にこんな美巨乳な幼馴染みが住んでるなんて、幸せでしょ？　だからもっと感謝しなくちゃね」
確かに人から見れば羨ましい環境だろう。毎朝可愛い幼馴染みが起こしに来てくれて、しかも胸を揉ませてくれるなんて普通じゃあり得ない。
「それにしてもあたしのおっぱい、大きさも形もすべてが完璧よね。我ながら惚れ惚れしちゃうわ～」
「自分のおっぱいなのに、よくそれだけ自画自賛できるな」

「美しいおっぱいなら、誰のだってあたしは褒め称えるわよ。ただ、あたし以上のおっぱいに今まで巡り会ったことないから、あたしはあたしのおっぱいを賞賛するの。ただそれだけよ」

呆れ果てて言うと、ツッコむ気も失せるような答えが返ってきた。

千恵が愛しているのは、あくまでも自分の美しいおっぱいだった。

士郎に触らせるのも、その極上の揉み心地を自慢したいだけなのだ。

彼女に対する士郎の感情は、あくまでも単なる幼馴染み。兄妹に対するものに近い。それは千恵の方も同じだろう。

そんな感覚で胸を毎日触らされても、嬉しさは半減だ。

それにもう一つ、士郎の気持ちを冷めさせる理由が二人の間にあった。

「もちろん士郎には感謝してるわよ。だから、今日もお願いね」

ピンクのタンクトップと黒いミニスカート姿でベッドに正座し、無邪気な笑顔を浮かべながら千恵が胸を迫り出してくる。

「またかよ……。もう十分大きくなったし、形も綺麗なんだからこれ以上いいだろ？」

「何言ってんのよ。完璧乳になったからって、気を抜いたらあっという間に残念乳に逆戻りなのよ。維持するには毎日の努力が大切なんだから」

士郎が渋ると、力説し始める。

「それにいつもあたしの胸をありがたく拝んでる士郎には、協力する義務があるのよ」
「拝んでねえよ！」
千恵の言い様に少しイラッとして声を荒らげる。
「男の子に揉んでもらうと、おっぱいが大きく綺麗になるんだから……。お願いだってば」
途端に、千恵は困ったような顔をしてお願いしてくる。
「ああ……」
上気する顔を誤魔化すように、士郎は不機嫌そうな表情を浮かべてぶっきらぼうに答えた。
『ねえ……士郎、あたしの、おっぱい……、士郎に揉んで欲しいの……』
初めて彼女が恥じらいながら求めてきた時は、愛の告白かと思った。
思春期を迎えて日に日に綺麗になってゆく千恵に、士郎は今までの単なる幼馴染みとは違う特別な感情が芽生えていた。
その想いを告げるべきか、告げるとしたらいつどのように、と悶々とした思いを募らせていた。そんな千恵のお願いに、士郎は彼女も同じ想いだったのかと歓喜した。
だけど幼馴染みの頭には、膨らみ始めたおっぱいを大きく美しく育てるという願いしかなかった。そのために、手近な男の子に揉んでもらおうと頼んできただけなのだ。
告白する前に、士郎は呆気なく失恋した。

それでもおっぱいへの興味に抗えず千恵の頼みを聞き入れ、そのままズルズルと今でも彼女の育乳役を続けていた。

自分のおっぱいにしか興味を示さない彼女への気持ちはすでに諦めたのだけれど、それでも単なる幼馴染みに留まらない複雑な感情を、兄妹のようなものという感覚にすり替える。

「それじゃ揉むぞ」

もういい加減慣れたと言いたいけれど、この瞬間には胸が高鳴ってしまう。

興奮を悟られないように、上擦りそうになる声を抑えて、士郎は彼女の背後に回ると撓(たわ)わな乳房を制服の上から両手で掴んだ。

「んんっ、ふあぁ～～」

タンクトップの布地越しでも、弾力を伴った柔らかさが掌をいっぱいに満たす。

もし直に触れていたら、そのまま無我夢中で揉み始めてしまったかもしれない。

何度触れても破壊力満点な至高の感触に揺さぶられながらも、士郎はどうにか平然を装った。

「へ、変な声出すなってば」

「だってぇ、最近感度も上がってきてるんだもの。士郎に揉まれる気持ちよさ、おっぱいが覚えちゃったみたい」

「そんなもの覚えてくれなくていいってば」
甘い呻きをこぼしながらビクンと震えた幼馴染みに文句を言うと、ますます悩ましく上擦った声で告げてくる。
この最中にもトクトクと脈打つ彼女の心臓が柔らかな房全体を微かに弾ませて、その振動を彼の掌に伝えてくる。
衣服の下に手を滑り込ませ、生の感触を直に味わいたい衝動に駆られた。
「じゃあ、いくぞ。揉むからな」
これ以上話すと、興奮が顔に出てしまいそうだ。おっぱいに欲情したなんて知られたら、ますます千恵をつけあがらせてしまう。さっさと終わらせようと、士郎は指先がめり込んだ蕩けるような房肉を大胆に捏ね始めた。
「あふ……、ん……、やっぱり士郎の揉み方、すごく上手。強く揉まれてるのに、優しくて……房全体の細胞が解きほぐされる」
指先がズブズブと房の奥にまで食い込み、激しく形が拉(ひしゃ)げるが、力を抜けばすぐに美麗な玉葱型に復元する。
「今この瞬間にも、おっぱいのレベルが急上昇してるの分かる。乳腺じんじん熱くなって、おっぱい細胞、分裂しまくってる。ふあぁぁ、現状維持でも十分なのに、士郎の指にあたしのお乳、高められちゃうっ」

緩急を付けて左右満遍なく捏ね回すリズムに合わせ、千恵の吐息が弾んでくる。
手の中で柔らかさを増してゆく房肉からしっとりと汗が滲み、身に纏った布地を微かに湿らせる。高まる体温にその湿り気が炙られ、汗臭さは皆無な甘いミルクのような香りを漂わせた。
（またエッチなおっぱい臭させて、千恵のヤツ……）
男の欲情をダイレクトに煽ってくる香気に、士郎の股間が狂おしい衝動に見舞われる。熱を帯びて高まる充血の疼きを押し隠して、仕方なく揉んでる態度を装うが、寝間着代わりのジャージの股間は、今彼女に振り向かれたら誤魔化しきれないほどのテント状態になっている。
「ん……、ふぁ、あ、はあぁ……。もっと、麓の方も、お願い、はぁ……」
「お、おう……」
掌に収まりきらないくらいのサイズなので、普通に揉んでいるとどうしても膨らみの上の方ばかり刺激してしまう。
お願いされて士郎は下乳を掬い上げるように押し上げ、根本から搾るような刺激を加えた。
「ひうっ！　んぅっ、は、あぁあっ!!　そ、そう……そんな、感じ、はぅうっ」
乳房の内圧が高まるような感触に息を詰まらせ、千恵が満足げに背筋を震わせる。

下乳を捲り返すように宛がった両手を谷間に滑り込ませ、大きく双房を押し広げる。
「あは、あああ、おっぱいぃ、広がっちゃうぅ……」
そのまま掌で再び膨らみを包み込みながら房の外側へ滑らせると、双房が大きく弾みながら元の位置に戻る。
「ンウッ！　ひはッ、あああぁ～～～」
おっぱい同士がぶつかりあう衝撃と、いつの間にか強張っていた乳首が掌に擦れる刺激に、千恵が切羽詰まったように喘ぐ。背筋を仰け反らせ、士郎にもたれかかってくる。
（うおっ、や、やばいっ）
反射的に抱き支えると、勃起した股間が彼女の尻に密着した。
せっかく平然を装っていたのに、これでは興奮していたのがバレてしまう。
「もうこれくらいでいいだろ？　俺もそろそろ仕度しないと遅刻しちまう」
慌てて身を離すと、士郎は上擦る声を抑えて千恵に言った。
「う、うん……、あたしもちょっと汗掻いちゃったから、着替えなくちゃ」
もっと揉めとねだられるかと思ったが、千恵も少し昂りすぎたのか、ほんのりと頬を上気させ、潤んだ瞳を伏せるように頷いた。
「じゃあ……、ありがとね、士郎」
汗ばんだタンクトップに美巨乳の上気した房肌を透けさせ、はにかみながら窓から帰っ

てゆく。
そんな幼馴染みの姿に、士郎の胸が大きく高鳴った。

※※※　※※※　※※※

手早く仕度を済ませ家を出ると、士郎は学園へ向かった。
急ぐほどではないがもたもたしていると結構ギリギリな時間。自然と歩む速度が速くなる。
「ああっ、待ってよ士郎！　置いてくなんて酷いじゃないの!!」
その背後から、千恵が小走りに追いかけてきた。
途端に新しく着替えた制服を盛り上げる美巨乳が、上下に大きく波打つ。近所の家から「いってきまーす」と元気よく飛び出してきた男子中学生が、その光景をモロに見てしまい、顔を真っ赤にして立ち尽くす。
大きく見開かれた目は、弾み続ける大きな双房に釘付けとなった。
興奮しすぎたのか鼻からポタポタと赤い雫が滴り落ちて、慌てて手で押さえる。
さらには股間まで大変なことになったらしく、前屈みで誤魔化そうとしていた。
「もう、士郎ったら何で先行っちゃうのよ。最近全然一緒に登校してくれないんだから」

いたいけな少年に罪作りなことをしているのにも気付かず、千恵は幼馴染みに追いつくとむくれ顔でグイグイと身体を寄せてくる。

大きすぎてその気がないのに触れてしまっているのか、それとも故意なのか、膨らみが士郎の肘に当たって大きく拉げていた。

「いくら家が隣同士だからって、恋人同士でもないのに毎朝一緒に教室まで行けるかよ」

いつものことだからと平静を装うが、歩く振動で柔らかな房肉が密着したまま震える感触が気になって仕方ない。

このままではさっきの少年みたいに、前屈みにならざるを得なくなる。

「恋人同士じゃないと、一緒に登校しちゃいけないの？　あー、もしかして士郎ってば、あたしをカノジョにしたいとか？」

「アホか！」

ニヤニヤしながら尋ねてきたのを切っかけに、さらに早足で千恵を振りきる。

初めておっぱいを揉ませた時に、真剣にそう尋ねてくれれば全力で頷いたのに。

おっぱいを育ててくれる男としか意識していないくせに、茶化すようにそんなことを尋ねてくる千恵にイラッとした。

「あんっ」

肘に弾かれて巨房が撓みながら弾むのが横目に見えた。

微かな刺激でも大きな衝撃でも、彼女のおっぱいは蠱惑的な反応を示す。
「も〜、士郎ってばあっ！」
千恵が小走りに追いかけてくる。肘に弾かれた勢いも加わって魅惑の胸房は左右上下に揺れ暴れ、大通りに出て増えた通行人の視線を一気に引き寄せた。
振り返らなくても美房の弾み具合が脳裏に浮かび、顔が赤らむ。
それを見られたくなくて、士郎は千恵との距離が縮まらないように足を速めた。

結局最後にはどちらも全力疾走の追いかけっこになって、二人は学園に到着した。
「おっはよー、千恵。今朝もいいおっぱいだね。最高の張りだねっ」
「ありがとう〜、今日も絶好調ぱいだよ」
「あれ、もしかしてまた大きくなった？」
「うん、起きてすぐ計ったら、二センチアップしてた」
教室に入るなり士郎は机に突っ伏して息を切らしているのに、千恵は元気いっぱいでクラスの女友達たちにいつも通りの乳自慢を繰り広げていた。
「あ〜あ、私にも少し分けて欲しいよ、千恵のおっぱい」
「だーめ、これは士郎が毎日揉んで育ててくれたおっぱいだもん」
両方の膨らみを愛おしげに撫で回しながら、悩ましい行為を千恵があっさりと口にする。

「はいはい、ほんと仲良いわよね、千恵と塞城って」
「いくら幼馴染みだからって、普通こんなことお願いできないもの」
初めて千恵が育乳の事を皆に打ち明けた時は、かなり驚かれたしドン引きもされた。
だけど彼女の底抜けな無邪気さと、その幼馴染みに対する士郎の素っ気ない扱いに、いつの間にか何となく受け入れられたような状況になっている。
でもやはり普通の感覚からすれば、毎日胸を揉ませる相手と恋愛関係ではないというのは不思議で仕方がないらしい。
「でも本当に塞城君って千恵のカレシじゃないの？」
「うん、士郎はカレシじゃないよ、幼馴染みだよ。おっぱい育てるのすごく上手だから、あたしがお願いして揉んでもらってるだけ。そうだ、みんなもおっぱい大きくしたいなら、士郎に揉んでもらえば？　あたし一緒に頼んであげるよ」
「え……、わ、私は取りあえずいいかな……」
「うん、わたしも、ちょっと……」
仲を疑うと、乳揉み育乳を勧められ皆尻込みした。
彼女たちがチラチラと横目に窺ってくるが、士郎は我関せずの無表情を保った。
下手に笑顔になったり、反応したりすると、好きでおっぱい揉んでると思われかねないのだ。

「なあ本当にお前と千恵ちゃんって、恋人同士じゃないのかよ」
女子の方は無視していれば、直接士郎に探りを入れてくることはまずないが、男友達はそうはいかない。
「聞いただろ？　それに俺ももう何度も言ったよな。俺はあいつの単なる幼馴染み。しかもアホみたいなおっぱい至上主義に付きあわされて、仕方なく胸を揉まさせられてる憐れな隣人。ただそれだけだ」
毎度毎度しつこい悪友たちに、毎度毎度同じ返事をする。
「やっぱり信じられねえなあ」
「だとしても、あんな可愛い幼馴染みのすっごいおっぱいを毎日揉めるなんて、やっぱり嬉しいだろ？」
「幼馴染みも赤ん坊の頃からだと、兄妹みたいなもんだからな、別に何も感じねえよ。それにどんなおっぱいでも、役割で揉まされるんじゃ嬉しくも何ともないから。面倒なだけだ」
これは半分嘘だ。面倒くさい気持ちはあるけれど、あんな極上の膨らみに触れてドキドキしないはずがない。本音を言えば、恋人として付きあいながらあのおっぱいをこの手で育てたかった。
だけどそんなことを、他人に言えるわけがない。

「この贅沢者め！　あの乳毎日揉んで、面倒くさいとか信じられねえよ!!」
「実は僕、この前勇気振り絞って、おっぱい揉まして下さいって真美谷さんにお願いしたんだけど、形が崩れると嫌だから士郎以外には揉ませないって断られちゃったんだぞ！」
羨ましがるだけでなく、とんでもないことを打ち明けるヤツまでいる。
「さっきも二人で楽しそうに追いかけっこしてただろ？　あの時のおっぱいの揺れ具合がすごくて、あの時周りにいたヤツらみんな大感激だったんだぞ。なのに塞城、お前は何でもっとありがたがらないんだよ！」
そんなことでむくれられても、返事のしようがない。
「だから俺はそもそも、千恵みたいに騒がしい女じゃなくて、もっと落ち着いた上品な女の子が好みなんだってば!!」
何を言っても千恵との関係を羨ましがる友人たちに、思わず声を荒らげる。
その言葉が聞こえたらしく、千恵がムッとした表情で睨みつけてきた。
こっちに向かってくるのでまた文句を言われるかと身構えるが、始業のチャイムが古ぼけたスピーカーから割れた音を響かせる。
それとほぼ同時に、担任の長沢響子（ながさわきょうこ）二十九歳独身恋人絶賛募集中が入ってきた。
士郎の周りで騒ぎ立てていたヤツらが、わらわらと散ってゆく。
千恵も士郎にべーっと舌を出して、ふんっとそっぽ向くと自分の席に戻った。

やれやれと溜息を吐きながら前に向き直り、クラス委員長の号令で、起立、礼、着席。
「えーと、ホームルームの前に、今日は転校生を紹介します、いらっしゃい龍堂さん」
もうすぐ三十路とは思えない無駄な可愛らしさを振りまきながら、担任が言う。
呼ばれて入ってきた少女に、クラスの全員が言葉を失った。
「ご機嫌よう皆様、わたくしは龍堂彩莉華。今までＳａｎ Ｆｒａｎｃｉｓｃｏの Ｈｉｇｈ Ｓｃｈｏｏｌにいたけれど、父の仕事の都合で本日からこちらの学園に通うことになりましたの。趣味は乗馬とフェンシング。他に書道とフルート演奏も嗜んでますけれど、どちらかというと、身体を動かす方が好きですわ。皆様、仲良くして下さいな」
自信に満ちた笑顔を美貌に浮かべた、威風堂々という表現がもっとも似合う自己紹介に皆が心を奪われた。
美少女の気高い佇まいに、教室が一瞬中世ヨーロッパの宮殿になったかのように思える。
上質のシルクのように白い肌。優雅にカールした髪は窓から差し込む朝日を受けて鮮やかに輝く黄金色。パッチリと大きな青い瞳と高い鼻筋は精緻な顔立ちと共に、異国の血筋を表している。
その容姿での完璧な英語の発音にドキリとするが、日本語は問題なく流暢だ。
腰が細く括れたしなやかな長身な上に、すらりと手足が長く。その完璧なプロポーションに纏った学園の制服は、他の女子生徒が着ているものと同じだというのに、全く別物の

龍堂彩

ドレスのように思えてくる。
　それだけでも見る者の心を十分に魅了する容姿なのに、皆の目が彼女の身体の一点に引き寄せられた。
　青いリボンタイを結ぶ純白の半袖ブラウス。その胸元が、今にもはち切れんばかりに盛り上がっていた。
「うおおっ！　すごい。美少女な上に、あのおっぱい……、真美谷さんより一回り以上は大きいぞ‼」
「制服が今にも破けそうになってるっ‼　歩いただけであんなに弾んで、まだ揺れ続けてる……」
　日々自分の乳房を美しく大きく育てることに没頭し、芸術的な美巨乳を周りにも自慢しまくる自パイ大好き少女のおかげで、このクラスの者たちは巨乳に対して見る目が肥えている。そんなみんなが、千恵を上回る大きさのおっぱいに驚嘆のどよめきを上げていた。
　大きさだけでなく服の下に完熟西瓜が入っているかのように完璧な弧を描く膨らみの形も、千恵の胸とは違った美麗さを醸し出している。
　ズッシリとした重みと、大きさの分だけ柔らかさも増した感触が伝わってくるような、転校生、龍堂彩莉華の美巨乳に士郎も思わず生唾を飲み込む。
「それじゃ龍堂さんの席は……、塞城君の隣が空いてるわね、あそこに座って頂戴」

「ええ、分かりましたわ」
沸き起こる賞賛と歓迎の拍手を当然のように笑顔で受けながら、彩莉華は示された席に向かった。
確かな足取りの歩みに少しの乱れもなく梳(くしけず)られた金髪が豊かに揺れ、撓わな美爆乳も軽やかに弾む。
男子も女子も呆けた顔でその様を見詰める中を、そんな視線など慣れているといった様子で気にも留めず、転校生は士郎の隣席へと腰を降ろした。
「よろしくお願いしますわ」
「あ、ああ、塞城士郎だ、こちらこそよろしく」
間近で見ると息を飲むような笑顔で手を差し出してくる。
跪いてその手に口づけしなくてはいけないのだろうかと、ファンタジー映画か何かで見たシーンを思い出しながら、自己紹介しながら握手に応じる。
――また塞城かよ！
――真美谷さんのおっぱい独り占めしてるくせに、あの野郎!!
クラスの連中から一斉に士郎への呪詛の呻きが上がった。
米国に住んでいたのなら、挨拶で握手は当たり前なのだろう。
だけど細い指をした手の柔らかな感触に、声が震えてしまい顔が仄かに赤らむ。

（そういえば千恵の手もこんな感じだっけ？　もっと小さくて、熱が高かったような……）
以前は当たり前のようにつないでいたが、最近は拒んでいた幼馴染みの手の感触を何故か不意に思い出して比べてしまう。
（って、何比べてんだ俺は。こんな美人で、おっぱいももっとすごい女の子と千恵なんかじゃ、比べものになるわけないだろ）
さっき友人に煽られて口にした好みのタイプの女の子。そのイメージを具現化してさらにレベルを一桁以上押し上げたような転校生に心が昂る中、担任と入れ替わりに数学の教師がやってきて、一時間目の授業が始まった。

※※※　※※※　※※※

まだ教科書が届いていないとのことで一時間目の授業の間ずっと、彩莉華は士郎の席に机を寄せて同じ教科書を見ていた。
髪から漂ってくる花のように甘く柔らかな香りが、間近だとさらに極上の香気となって軽やかに鼻を擽ってきた。
時折腕同士が触れてしまう感触に、今が夏でよかった、夏服万歳と叫び出したい衝動に駆られた。

扱かれる度に増すヌメリで、波打つ双房の狭間からヌリュヌリュ、グッチョグチョと悩ましい音色が静かな密室に響く。

もし図書室の方に誰かいたら、このイヤらしい音色も二人の喘ぐ声も全部聞かれてしまっているに違いない。

竿肌と擦れあいながら、亀頭の括れにまで寸分の隙間なく埋まり込んで絡みつく柔房肉の際限がない快感に、灼熱の衝動が込み上げてきていた。

「くふっ、お、あ、あはぁあぁっ、わたくしの、おっぱいの中で、ああぁあ、士郎のおちんちん、激しく震えています。んあ、また大きくなって、硬いのが、ふあ、あぁ、谷間でおっぱいに擦れてるっ!!」

もういつ射精してもおかしくない切迫に苛まれ痙攣し続ける勃起竿が、充血を増して爆房の谷間から矢尻型の亀頭をひょっこり覗かせる。

そこから立ちのぼる生臭い牡臭が、節くれ立って硬直した竿肌が谷間の潤む乳肌を刮げる刺激と相まって、彩莉華を陶然とさせる。

「あはぁあ、おちんちん、士郎の……おちんちん、わたくしの谷間から、お顔出してますわ。先っぽから、ヨダレ垂らして、イイ匂い……させてますぅ」

滴るカウパーが谷間の汗と混ざりあって、淫靡な音色と香りを高まらせる。その先っぽに、彩莉華が熱い興奮の吐息をフーフーと吹きかけてくる。

「だ、だめだ、彩莉華ッ。もう、出そう……なってるから。止めて、くれ。あ、あああぁっ、気持ち……よすぎるッ」

もっといつまでもこの快感を味わい続けていたい。

だけどこのままではすぐに射精してしまい、彩莉華の極上な美爆乳を汚してしまう。

甘美の虜になって自分から腰を引くことができず、士郎は彼女にパイズリの停止を懇願した。

「そんな、まだわたくし、士郎にお返ししきれていませんわ。もっと存分に楽しんで、士郎が出したいのなら、出して下さいな」

恐らく何が出るのかとか全然分かっていない。

少年にパイズリの快感を施しながら自身も甘美に酔いしれて、乳房を中央に押し寄せ、ギュゥ〜〜〜〜〜〜〜〜ッとちんぽを圧迫してきた。

「ふぁあああああぁっ!!　そんな、されたら、出るッ、もう、出るぅううっ！」

柔らかい塊にムッチリ包み込まれる感触が密度を増し、それだけでも快感が限界を超えているのに、育乳で増した弾力が充血ではち切れそうな海綿体を追い詰めた。

「ひあっ、あふぅううっ、あぁあああぁっ!!」

尿道を駆け上る灼熱の刺激に剛直が跳ね暴れて、乳房を激しく波打たせ彩莉華が歓喜の喘ぎを張り上げた。

「くぁああぁっ！」
どびゅうううっ!! どぴゅどぴゅどぴゅ、びゅるるるうるぅううっ！
堪えようとしたが灼熱の衝動は、狂おしい快感を伴って士郎の陰茎から彩莉華の乳房の谷間へと怒濤の勢いで迸った。
「ふはぁあぁぁっ、熱いのがっ、お乳の中にッ。出る……って、これでしたのね？　あ、あああっ、まだたっぷり、どくどくと、士郎のおちんちんから溢れています!! ヌルヌルの、お汁ッ。いっぱい、ふぁああ、熱くて激しいの、イッパイいいいっ！　あはぁあぁっ!!」
濃厚な汁の奔流が房肌を打つ刺激と、ギュッと寄せられた爆房の密閉された中に大量の精液が溜まりゆく感覚に彩莉華が感極まって酔いしれる。
だがそれも束の間、収まりきらなくなった白濁が、乳房の谷間からブジャッと噴き出して、金髪碧眼の美貌にべっとりとへばりついた。
「ふあぁぁあぁ～～～、この匂いぃ、これが、士郎のおちんちん汁の、匂いぃ。身体の力ぁ、抜けてしまいます～～」
男のちんぽから出たスペルマなんかをいきなり顔にぶっかけられたら、大概の女の子は嫌悪感を示すと思うのだが、彩莉華は蕩けた顔をますます嬉しそうにうっとりとさせて呟いた。

彩莉華の苦痛に歪んだ美貌に詫びながらも、突き込む度に締めつけを強くしてくる牝穴を貪る。

「い、いいのです。士郎が、わたくしに夢中になって下さるの、嬉しい、から、あぁああっ、そ、それに、だんだん、これ、き、気持ちよく……なって……。ふあ、あ、あはぁああぁっ!!」

激しい刺激を和らげるために滲み出たタップリの愛液が、ぬちゅ、ぐちゅ、と艶めかしい音色を響かせて膣襞と剛直の擦れあいに甘美をもたらしていた。

「こっちも、中でちんこ擦れてるの、気持ちいいっ。なのに彩莉華のま○こ、締めつけてくるから、ますます、はぅううっ！」

「はぅうう、恥ずかしいですわ。ああ、わたくしの身体、士郎のおかげで本当にはしたなくなってしまいましたぁ、ん、くあ、あ、あぁああっ!!」

女性器の名称を口にしながら膣内の感触を告げてくる士郎に、彩莉華は恥じらいながらもますます乱れてゆく。

自分からも身をくねらせ快楽を求める動きに、撓わな双房が揺らされたプリンのように波打った。

「おっぱいまで、ますますエッチになってるっ。あぁ、彩莉華ッ」

正常位でストロークを繰り出しながら、その膨らみに士郎が引き寄せられる。

さっきは彩莉華が感じすぎてすぐに終わってしまった乳首しゃぶりを再開させようと、唇を膨らみに押し当てる。

「ひあああっ！　お、おっぱいまでっ‼　んはぁっ、あ、あぁああぁぁっ、おちんちんで中掻き回されるの、気持ちよくなってきたのに、ふあ、あ、あぁああぁっ、おっぱい、そんなされたらっ！　ふわあぁぁあああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ‼」

膣の快感が高まるほどに、爆房が蕩けてその分乳首の充血が増している。

ストロークを勢いづかせながら、そこを舌先で容赦なく転がし、顔を膨らみに埋めて子供のようにむしゃぶりつく。

「ふぁああっ、そんなことを、されたらっ。士郎ッ、あぁああっ、士郎ッ」

感度を増した乳首を嬲られて全身が脱力するほどの快感に見舞われながら、恋人に甘えられる喜びに母性本能を刺激されて彩莉華が打ち震えた。

「わたくしの、おっぱいにそんなに甘えてっ！　ふあ、あ、あぁああぁっ、士郎に、わたくしの母乳、飲ませたくなってしまいますぅうっ‼」

士郎をギュッと抱きしめ、ますます膨らみに顔を埋めさせてくる。

「くふっ、あぁああっ、彩莉華ッ。俺も、お前に……ッ。はうっ、もう、出るッ！」

彩莉華の母乳を味わいたい。そのためには彼女を孕ませなくてはならない。

そう意識しながら、深く激しい突き込みで孕むための牝器官を弾き上げると、彩莉華の

膣穴は陰茎を搾るように締めつけてきた。
「くあぁぁあああっ、そんなにされたらっ、本当に出るッ。彩莉華に母乳出させる液、膣内に射精しちゃうっ!!」
尿道を灼熱の衝動が迫り上がってくるのに、ストロークを抑えることができずますます激しく動いてしまう。
「ああっ、射精して下さいッ。士郎の、わたくしの膣内にッ。母乳出るように、して下さいませっ」
乳房をしゃぶられる歓喜に何度も背中を震わせ、牝壺を突きまくられる衝撃に声を弾ませて彩莉華が膣内射精を嫌がるどころか求めてきた。
「く……ッ、ああぁっ、気持ちよすぎるッ、膣内も、おっぱいもっ。で……射精るッ」
どびゅううっ、びゅるびゅるびゅる、どぴゅどぴゅどぴゅうううっ!!
「ふあっ、あ、あぁああっ、出てるッ。わたくしの膣内に、出ています、士郎の熱いのが、あ、あああぁあああぁっ、奥にいっぱい当たってッ。母乳、出る身体に、されてしまいますっ、ふあぁあああ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッ!」
おっぱいにむしゃぶりつきながら子宮に激しく注ぎ込んでくる士郎の精液に、彩莉華の歓喜も一気に絶頂へと達した。
彼に母乳を与えられる身体になれる喜びと共に、あられもない嬌声を張り上げて全身を

幾度も震わせる。
「はぁ……、あ……、ああぁ……、これで士郎とわたくしは、心も身体もつながった、恋人同士です……。わたくしの、士郎……」
絶頂の余韻に震えながら、彩莉華が嬉しそうにギュッと抱きしめてくる。
「俺も、嬉しい……。彩莉華と恋人になれたなんて……。彩莉華とこんな気持ちいいエッチ、できたなんて……」
おっぱいが切っかけで親しくなり、あっという間に身体を交わらせる関係にまで辿りついてしまった。まるで夢のような幸福をまだまだ味わい続けたくて、士郎の勃起は収まるどころかますます硬さを増す。
「ああ、まだ士郎のおちんちん、元気ですね。わたくしも、膣内にタップリ注いで頂いたのに、まだおっぱいが物足りなくて。初めての時、あのような心地よさを知ってしまいましたから……」
士郎の勃起状態に気付いて、彩莉華も乳房の谷間に射精された快感を思い出して求めてくる。
「ですから、またここに士郎のをいっぱい下さい」
股間からこぷこぷと、彼が放った白濁を溢れさせながら、圧倒的な乳房を自分で押し広げて誘ってくる。

「ああ、俺も……、彩莉華の膣内気持ちよくて、そのおかげでおっぱいも味わいたくなったから！　く、あ、あぁぁぁ、柔らかいのが、ちんこ、包み込んできた!!」

求められるままに、爆房の谷間にペニスをめり込ませると、射精直後で鋭敏になっている肉棒が圧倒的な抱擁感に見舞われた。

「おっぱい、気持ちよすぎる！　彩莉華ッ!!」

たまらずに最初から全力のストロークを繰り出して、士郎は極限の柔らかさと弾力が共存する房肉の快感を貪欲に貪り始めた。

「はううっ、あぁぁぁあっ、おっぱいの中でッ、士郎のおちんちん、この前よりも激しいっ!!　はうっ、あ、あぁぁあぁっ、揉まれるのも気持ちいいけれど、おちんちんで中からメチャメチャにされると、ふあ、あぁ、わたくし、ダメになりそうですぅう、あふぅうっ」

彩莉華もイッた直後で身体が敏感になっているらしい。爆房を激しく波打たせて拉げさせる激しい刺激に、子宮を弾かれた時以上の蕩けた表情であられもなく悶えた。

「くふうっ、こんなに激しく突き込んでるのに、ずっとおっぱい絡みついたままっ。気持ちいいのに包まれっぱなしになってる！　もっとこれ、味わっていたいのに、もうっ、ああぁぁぁ、もう、出るッ。射精しちゃうっ!!」

どびゅうううっ、びゅるびゅるるぅう〜〜〜〜〜ッ！

「ふぁぁあっ、あ、あぁぁぁ、あんなに中に射精したのにッ、おっぱいにも、いっぱい射

精してるぅッ。士郎のおちんちんっ、ビクビク震えて、わたくしのお乳に中出ししてるっ。くふぁああああぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ!!」

膣内に突き込むのとは違った味わいの快感に、過敏な陰茎はあっという間に射精の衝動が押し寄せて、ろくに我慢もできないまま大量の白濁を乳の谷間に放った。

「くあ、あぁあぁ……、またこんなに、わたくしのおっぱいに射精してくれたぁ……。熱い、おちんちんの汁、膣内にも胸にも射精されて、わたくし、幸せですぅ……」

谷間から溢れ出る白濁の脱力的な香気に酔いしれて、彩莉華はいったん収まった絶頂の余韻をぶり返すように、朦朧とした眼差しで何度も身体を震わせ続けた。

※※※　※※※　※※※

「やっぱりすっごい大きさだわね、彩莉華ちゃんのおっぱい」

彩莉華から奪ったブラを胸に当ててみると、大きさでもかなり自信があった千恵のおっぱいでさえぶかぶかになる。

「やっぱり大きさで負けちゃったから士郎も取られちゃったのかなあ?」

確かに彼はどちらかというと巨乳好きだと前から思っていたけれど、総合的には自分の方が高いのだから魅惑できていると思っていた。

だが千恵はさっぱり人の言うことを聞いていない。勢いを増したストロークが、ヌメヌメの蜜汁を掻き回す音色に興奮していた。

「気持ちイイと、いっぱい愛液溢れてきちゃうんだね。さっきから、ちんちん刺さってる穴の奥が、じゅんじゅん疼いて、んふっ、ふあ、あああぁ、い、今も、熱いの滲んできちゃってる～」

「くっ、ううっ！　また、締めつけてッ」

キュンと膣壁が窄まると共に熱い飛沫が亀頭に浴びせられ、蠱惑の潤滑が一段と増してゆく。

「士郎におっぱい育ててもらっている時にも、あふ、あああぁ、本当は、あそこが、濡れちゃってたんだけど……ひうっ、はぁ～～～、あ、あれって、士郎のこと、好き、だったから、なんだね……」

捲れたスカートから覗くショーツに、濡れ染みが広がっていたことには気付いていたけれど、彼女の奔放な振る舞いからそんな気持ちは伝わってこなかった。

（だから、俺のことなんか何とも思っていないくせに、おっぱい揉ませやがってって、頭にきてたのに……。って今更どうでもいいのに、そんなこと。俺には彩莉華がいるんだから）

あの時の悶々とした気持ちが甦ってしまい、慌てて否定する。

「ん、ああ、はぁ～～。今も、士郎を好きな気持ちで、胸がいっぱいになると、あ、あ、あぁあ、んあっ!!　ほ、ほらぁ、愛液ぃ、いっぱい出ちゃうぅ」

まるで軽くイッたみたいに膣壁が震えてペニスに絡みつきながら、熱い蜜を大量に分泌させる。狭い穴の中に収まりきらず、挿入の隙間からストロークの勢いに押されて、濃度を増した飛沫が飛び散った。

（お、俺のちんこで、こんなに……ッ。千恵のヤツ、本気で俺のこと……？）

彩莉華に対抗して急に好きとか言い始めただけで、すぐにあっさりと心が変わるんじゃないかと疑っていた幼馴染みの熱烈すぎる反応に、胸が熱くざわめいてしまう。

「士郎も、ふあ、あぁあぁ、あ、あたしの、お、おっぱい育ててるときぃ、はわぁ、あンッ、いつもおちん……ちん、お、あ、あぁ、大きくさせてたから、くふ、本当は、あはぁ、あ、あぁあぁ、あたしのこと好きだったんじゃないかな～って」

「そ……そんなわけあるか!!　ちんこがでかくなるのは、ただの反応だってば！」

「で、でも、反応……してくれたのは、ああっ、た、確かなんだしぃ、い、今も、あたしの膣内で気持ちよくなって、また……ビクンってして、あぁあぁあぁ～～～イイッ!!」

いくら反論しても千恵は自分の都合のいいように解釈して、膣穴を男根で掻き乱される喜びを満喫する。

（男が女の胸揉んだり身体が密着したりすれば、エロい気分になって勃起するのは当然だ

し……。俺がドキドキしてるのにこいつは平然としてるし、恋人でもないのに胸なんか揉ませるから苛ついたけれど）

自分は千恵への恋心を抱いていたのに、彼女は士郎を育乳係としか見てくれなかった。それが悔しくて、わざと千恵にはぞんざいな態度で接したりもした。

（って、何で千恵が言うことに誘導されてるんだよ！　こいつは単なる幼馴染みだからっ）

今までもそうやって彼女に惑わされる自分を抑えてきたけれど、自分でもよく分からない本心を千恵に探られてもしかしたらと思ってしまう。

（俺は……千恵が、好き……なのか？）

心の中で自分自身に尋ねてみる。その途端、

「はううっ！　あ、あぁぁっ、士郎の……おちんちんッ、また、膣内ではねたぁ」

訳の分からない動揺に、下腹部が大きく脈打って千恵の襞壁を揺さぶった。

（な、何だ、今の？　何で千恵を好きかもって思っただけで、こんな……。お、俺は彩莉華が好きなのに、二人いっぺんになんて、ダメだろ⁉）

そんなことが許されるわけない。だけど心に湧き上がる感情を自覚するほどに、妙な興奮が膨れ上がって海綿体を痛いほどに膨張させた。

「あ、あぁぁあっ、それに、ますます大きくなって、んぅ、お、奥……ッ、ふあ、あああぁ、たくさん当たって、あたし、おかしくなりそうっ」

膣壁を押し広げて擦れあう感触の密度を高めながら、子宮をコンコンと弾き上げてくる剛直の狂おしい刺激をもっとたくさん味わおうと、千恵の腰使いが激しくなり、乳房を水風船のように暴れさせる。

「くううっ、あぁああっ、そんなに、動くなってばっ。穴ぁっ、締めつけっぱなしだし」

刺激が大きくなると膣壁が収縮し続けて、ペニスの感触を一切逃さず味わい尽くそうとしてくる。

「だってぇ、士郎のおちんちんが、あたしの膣内で気持ちよく暴れるんだもん！　やっぱり、あたしのこと好きなんだね⁉　おちんちんが教えてくれるから分かるよ。ほら、おっぱいもこんなに喜んで、あぁああああっ、弾んじゃってるっ！」

息が詰まるほど海綿体を搾られて窮屈なのに、愛液はますます溢れかえって、ぐちゅぶちゅと淫靡な音色を響かせながら竿と襞を滑らせた。

「大好きぃ！　今頃、分かって、んぁ、はぁあっ、自分でもびっくりなんだけど、んくっ、あたしぃ、士郎のこと、好きぃ、だからぁあっ、ふあ、あ、あぁあっ」

お前も早く、気付いてしまった本心に素直になれと言わんばかりに、騎乗位の身体を激しく上下させて千恵が想いを告げてくる。

「お、俺……俺は……。俺はぁあっ！　彩莉華のことが好きだしっ、千恵のこともッ」

そんな都合のいいことが許されるわけない。どちらか一人に決めなくちゃいけない。だ

からもうすでにお互いの気持ちを伝えあって、恋人同士になった爆乳転校生が好きだと告げたのに、昂る心が幼馴染みの名を絞り出した。

決定的な一言は踏みとどまったが、もはや言ったも同然だ。しかも本心を証明するかのように、士郎の腰がはね上がって千恵の膣穴を勢いよく突き上げる。

「あぁああはぁああっ、んぃいいっ、士郎のおちんちんっ!! あたしの膣内ッ、中ぁああああっ、激しいッ、奥ぅ、あ、あぁああっ、気持ちイイの、ズンズン、来るぅあぁああああっ!」

積極的になった幼馴染みのストロークに歓喜して、その刺激を過剰に味わおうと腰をくねらす動きに移行する。

乳房も横への振幅が大きい揺れに変わり一層艶めかしく拉げては美麗な形に戻るのを繰り返す中で、子宮が弾かれる度に、怒張を締めつけっぱなしの壁襞が波打つような痙攣を繰り返す。

「あぁああっ、好きぃ、士郎ッ、これえ、気持ちいいよおっ!! おっぱいが一番だけど、士郎のおちんちんに膣内メチャメチャにされるの、あうっ、はぁあ、あ、あはぁあああっ、気持ちイイのッ! 大好き……ッ、あたしの、あぁああっ士郎おおおッ」

恍惚の表情で、気付いた想いを何度も告げながら、汗ばんで上気した身体をくねらせて歓喜の頂上へと昇ってゆく。

「俺……は、もう彩莉華の恋人、だからっ。千恵とは、付きあえないからっ。くぅうっ、あぁあああああっ。ち……千恵ッ、ふぁあああああああっ!!」

幼馴染みの求愛を拒みながらも、胸の鼓動と抽送は一段と勢いを増す。

彼女を歓喜させる悦楽の擦れあいに、士郎の海綿体にも灼熱の衝動が込み上げてきた。

「ふぁあああっ、おちんちんビクビクしてるっ、ビクビクッ、あ、あぁあああっ、士郎のおちんちんが、あ、あたしのことぉ好きって言ってくれてるぅううっ!」

射精の予兆に陰茎が打ち震え、痙攣を繰り返す狭膣をさらに揺さぶった。

「んはぁあああああっ、い、いくぅううっ、はうっ、あぁぁあああっ、しろ……おぉお、あはぁあああ〜〜〜〜っ!!」

それをおちんちんの求愛と受け取って、千恵が感極まりヴァギナの震えが拡大したように激しく全身を痙攣させて絶頂に達した。

「くうっ、あぁあああっ、イッてる……。千恵が、俺のちんこでっ。おぁあああっ!」

降りてきた子宮の口がチュパチュパと吸いつくように亀頭の先を咥え込み、襞壁が陰茎をますます締めつけ、竿肌を襞が撫で回すように絡みついてくる。

彼女の想いがこもった快楽の刺激に、士郎の尿道も灼熱に染められ、狂おしい快感の奔流を噴き出した。

「あうううっ、出るッ。千恵の膣内に、射精しちゃうッ!!」

どっびゅううう、びゅるびゅるびゅる、びぶぶびゅびゅるる〜〜〜〜〜〜っ！
「あひっ、あぁあああっ、熱いの、すごいのッ、おあ、あぁあああっ、ん奥ぅうう、ふあ、あわあぁ、あ、当たってるぅうう。士郎の、あぁあああ、射精ッ、あたしの膣内にぃ、くぅう、子宮に、いっぱい、出されてるッ、ふぅぁあああああああはぁあああああっ!!」
夥しい射精に子宮を直撃され、千恵は頂点に達した快感をさらに高くへとはね上げた。
「くふぁああ、士郎の……手で、おっぱいぃ、ああぁあ、触ってッ、はぁあああぁ〜〜〜〜〜〜〜ッ!!」
士郎の手を取って、自分の胸に押し当てながら千恵は感極まってもう一度絶頂に激しく身体を痙攣させた。
「あ、あぁ……千恵……」
びゅるびゅると断続的に噴きこぼれて千恵の膣内を染め上げた白濁汁が、膣壁がキュンと窄まる度にペニスと膣口の隙間から濃密な飛沫を散らして溢れ出た。
「くふっ、ああぁ、今出したばっかりなのに、士郎のおちんちん、まだ大きくなってきてるっ。あたしの穴ぁ、もっと押し広げてくるっ」
「千恵が、おっぱいなんか触らせるから！」
感触がよすぎてちんぽの充血が収まるどころかますますすごいことになって、精液で蕩けた膣壁を拡張している。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

ドキドキラブラブな
ハーレム系ライトノベル！

二次元ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう！
かなり過激なライトノベル！

※二次元ドリームノベルズは18歳未満の方は購入できません

二次元ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル！

サイズ:文庫

リアルドリーム文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ！

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!